

亀川四の湯町にある亀川町唯一のキリスト教教会である。インマヌエルキリスト教とは、日本で起こったキリスト教である。教義は、聖書を中心にして愛と平和を教えるという、内容である。最近は関の江にも新しい教会が出来たのである。温厚な牧師さんとその夫人が信者さんたちのお世話をしている、たいへん暖かい、落ちついた、上品なたいへん良い教会です。

私は、このような、いろいろな信仰をまた宗教を通して、今のように人の心が砂漠のように乾燥した中で、宗教はたいへん有益なものだと思っています。心が豊かな者、心が満たされている者は幸福です。けっしてお金などでは、心を売り買ひすることは、できません。心の楽園、心のオアシスは、無駄なものではありません。亀川の信仰はみな、たいへん良いものです。亀川の信者さんたちは、心の広い、心の暖かい人たちばかりです。私は一生信仰を持ち続け、この世の中の為になる、「何か？」を行なっていこうと思っています。「継続は力なり」と言います。一生努力しようと思います。これで亀川の民間信仰の報告をおわります。

別府の伝説

由布岳・鶴見岳

堀

藤吉郎

由布岳と祖母岳の妻争い

九州の背骨と言われる九州山脈、しかも九州の山の殆どが火山系に属するのにこの山脈だけが火山系でなく九州で一番長大な山脈をもって原始的な姿を現し、森林に覆われていること。九重や阿蘇の山々と違ってあまり今では登山者の山歩きの少ない未開といってもよい程の山々が連なっている。今では祖母傾山系として県立公園となつて、近ごろ登山者の関心を持って来た山で、九州では珍しいといわれる熊やカモシカが生息していて、学会の問題になっている。この峰々の盟主となっている祖母岳（二、七五八米）と阿蘇火山脈の通過している標識的な死火山、豊後富士とか筑紫富士とも呼ばれる由布岳（二、五八三米）のこの二つの山の妻争いの伝説が語り

つがれている。

祖母岳と由布岳はともに男の山である。由布岳のお隣に居る鶴見岳は女の山である。清和天皇の貞観九年正月二十日に大噴火して大きな爆裂口をつくった山である。

祖母と由布は長い年月鶴見のお山が好きで好きでならなかった。そして祖母と由布のお山は、いよいよ本格的に鶴見を自分のものにするために、昼となく夜となく一生懸命に恋の競争をはじめた。いろいろと自分の自慢話をして聞かせたりして、鶴見の関心を求めることに汲々きゅうきゅうである。鶴見は女のつつましやかさで二人の話を聞いて笑っている。そして鶴見の愛をうるために自分のお山にできた珍しいものを持って来ては差し上げ、双方とも夢中で血道を上げてゆくのであった。

鶴見は祖母が好きとも由布が好きとも言わずに、自慢話を聞いていた。その後年か過ぎて雪の日も雨の日も風の日も、日向と豊後の国境にある遠方からかよって来る祖母は、どうしても恋しい鶴見を自分のものにせねばならぬと、由布を殺してやろう、恋仇の由布が隣にいては、遠方からかよう自分はやりきれぬと毎夜付近の山々

の寝静まった頃考えている。いっぽう由布は、恋しい恋しい鶴見のお山が自分の隣に居るのに、祖母に取られて夫婦にもなれば、いい物笑いになると、これも一生懸命に機嫌をとることを忘れない。

静かに月のあがる中秋の夜、由布は鶴見に向かって、「私は何百年も前から貴女を愛していますが、私の真心が貴女にとどかないのが残念です貴女を恋する心は決して祖母の奴には負けません。せつかく貴女と長い間隣どうしで暮らして来たのです、私の気持ちも知ってもらいたい。」と涙を流して話した。相手の鶴見のお山も、「本当は私はあなたが好きですが、あんなに二人で競争されては、私はどうして良いか分かりません。」

それからというもの二人で夫婦の契りを結んで結婚してしまった。何も知らぬ祖母は、沢山のお土産を持って来たが、恋仇が夫婦になったことを近所の山々から聞かされて土産物を投げ出してさめざめと男泣きに泣いたということである。

泣くたびに涙が滝のように頬を伝って流れ落ち、凹地に溜まった。それが今の志高湖であると言われている。

その後祖母はは恋仇の由布やつれない鶴見に姿を見られるのを嫌って、沢山の木々を繁らせて見られないようにしたという。祖母岳が黒いのは、みんな山を囲んでいる大原始林である。

由布岳と日向岳の背比べ

由布岳は霧水の景観とミヤマキリシマの群落で知られているだけでなく、高山植物のマイヅルソウ、イワカガミの群落で、登山者仲間に憧れのまよになっている美しい山である。

日向の国、今の宮崎県に非常に高い山があった。この山は日向でも高山のなかに数えられていて、「自分は日向でも相等に名の売れた山だ」と威張って近所の山々の憎まれものであった。ある時友達の高が日頃自慢のこの山を困らせてやろうと、

「お前がそんなに威張っても駄目だ。豊後の国に由布岳といってとても高い山があるそう。その山にはお前も

勝てないだろう。」と、周囲の山がけしかけると、

「由布岳が何にだ、そんな山に負けるものか。」といつて、弁当を腰に提げて、遙々遠い道はるかばかをのそのそ歩いて行った。長い月日を掛けて日に夜をついでとうとう城島の西の猪の瀬戸という所までやってきた。そして由布岳には、「お前は豊後でも高い山だと聞いてきた。俺も日向では相等名を売った山だ。一つ背比べをやってみようではないか。」

それから、二人並んで背比べをやったまではよかった



が、どうしたものか威張ったくせに背高は由布の乳首までの高さしかなかった。日頃の自慢を鼻を折られて腰を抜かして、日向の国の古巣に帰りずらくなって、由布岳の子分格となってしまった。

城島の高原から由布岳の西に仰ぐ手前に、松の植林をしてある円錐型の山がある。五万分の一地図には山名が記入されていないが、この山を日向岳という。美と力を持つ由布岳と背比べをした相手の山であると語られ、日向から来たので日向岳と呼ぶようになった。標高は一、〇八八米で麓には猪の瀬戸といふ広い湿原しづげんを抱いて、サクラソウ、エヒメアヤメ、ハナシヨウブなどの沢山の植物が自生分布している。

旅人に恐れた猪の瀬戸の壘

九州横断道路の別府と由布院のほぼ中間に、猪の瀬戸の湿原盆地がある。ここから由布、鶴見の山峽を縫ぬって塚原盆地に通じる道路がある。この道は、昔は玖珠から

由布院を通り、十文字高原を越えて頭成かしらなりの港を結ぶ玖珠街道から、別府や府内（大分）へ抜ける道であった。あたりは樹木が鬱蒼うっそうと繁り陰鬱いんうつな湿原のなかを通る道であったという。

昔、ここには壘（マジモノ）がいて、疲れて樹かげなどに憩う旅人に憑いたりしていた。壘に憑かれると眠きを催して、ついには喰い殺されてしまう、魔の山道と言いつい伝えられていた。

近くに住む村人は、怠け者が居ると、

「仕事が嫌でいつも寝て食われるのが好きなら、猪の瀬戸にゆけ」といつていたと語り継がれている。

ここは水も豊富にあり、険しい山道を越えて来た旅人は、喉の渇きを覚えて木陰に休みたくなる場所でもあった。壘は、疲れて空腹の者に憑く姿のない魔物の虫で鐵虫（ヒムシ）ともいわれていた。

「猪の瀬戸を通るものは米粒でも何でもよいたべ物を持って行け」といつていたと、古老は教えてくれた。

猪の瀬戸は魔の難所といわれ、壘に憑かれて死んだ者を供養する石祠があるが、他に明治以後にもさまざま

獵奇事件や殺人事件があったので、この瀬戸に不動明王の石像を建立して悪霊調伏の大法要を行った。それ以後は不動明王の御利益で蠱に憑かれる者もなくなったといわれる。

新しい道路が開通して、今は不動明王の祠も道路からはなれ、道行く人々の参詣も少なくなってしまうたが、堂々たる風格を現した石像である。

由布の峰より飛んだ霧島大権現

大分郡との境に山の口という地区がある。この地区の捏山という所から清流が滝となり瀬となって流れ下っている。この溪谷が山の口溪谷である。この溪谷の右岸の三角山の頂上に霧島神社が鎮座ましまして、

人皇代四十九第光仁天皇の宝龜元年、細かくいうと庚戌の歳（七七一一年）に、日向の国から由布岳（木綿岳）西の峰の石上に霧島の神が雲にのって飛来した。天から六つの星が輝いて、それがやがて六つの白い幡となって頂上に突立ち、六つの燈籠も忽然とあらわれた。明けて

宝龜二年の二月の夜、日頃から霧島大権現を信仰する河野小太郎という者の夢枕に現われて、大権現のお告げがあった。

「我は、いま由布岳の西峰にあるも、由布の峰は有縁の地にあらず。この峰より巽（東南）に当たる川辺に我を祀れ。夢々疑うことなかれ。」

小太郎は、三晩も続けて同じ夢を見るので、これは不思議なことじゃ、といつて由布岳の西の峰に登ってみると、紫雲たなびき六本の白幡が翻っているので、早速山の口の石の上に祠を建てて、大権現を勧請した。

明る三年二月十九日の夜、またまた小太郎の夢枕に、弥陀、観音、勢至の三尊が現われて、

「我は、先年汝の夢枕に立った霧島大権現であるぞよ。ここより坤の方に小岳（山の口溪谷三角山）がある。我にとつては有縁の地である。」

と御告げがあったので、小太郎はあまりの不思議さに村人と相談した。村人も霧島大明神もよっぽど山の口がお好きであろうということで、山上に神殿を建立して山のまわりに桐や松や榎の木などを植えて鎮守の森をつく

り、盛大に遷座せんざの式を挙行了した。

現在霧島大明神が鎮座している山は三角山みすうと呼び、山の口一円を眺める高丘で、石畳の参を登ると頂上に老樹が五六本天を摩して聳えていた。勧請当時に植えられた神木は伐られて神社の再建費にあてられて今はない。

霧島神社は村人に崇敬される総鎮守となつてゐるが、神仏混淆こんぶくごうの本地垂迹ほんちすじやくにからむ伝説のある神社である。

異変を知らせる鶴見岳の踊石

鶴見さんの中腹に火男火売神社が鎮座している。靈験あらたかなお宮として、毎年十月九日の大祭に、昔は牛馬市もたち遠近の善男善女が参詣して、参道市をなす繁昌ぶりであった。

古は、比叡山の講経談議所として社坊が栄えたところで、修験者の道場となつていたので、山伏の物語が伝わっている。

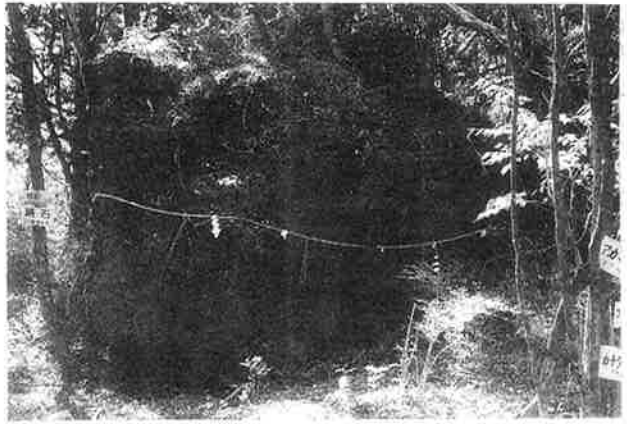
火男火売神社の社殿を抜けて鶴見岳の登山道にかかる
と、頂上に向かって左側に小道が入り込んでいる。この

道は男岳と鶴見の主峰の山峽を通過して鶴見の北尾根、硫気孔に下る所に出合う道であったが、今は荒れて途中で消えてしまつてゐる。この道の脇に「踊り石」という奇岩がある。

「踊り石」といつているが、これは鶴見岳鎮護の神火男火売神社の奥の院の神石かみいしと謂れ、高さ九尺位の大石である。この石が時々踊ることがあると言われている。國に何か異変があつたり、大雨が降る前とかは大いに踊つたという。しかも、この石が躍り上がるときは、数十丈に及び、恐ろしく大きな音を立てて、その音は二十里四方に聞こえたことである。

宝曆の別府付近の山崩れの前にもこの石が鳴動し、日清戦争の起る前も鳴動したと土地の古老は語っている。

文化年代(百五十二年前)、豊後の儒者、脇蘭室わきらんしつの書いた本の中に「この山上に踊り石と称する巨石あり。時ありて自から踊りて移るといふ。その響き数十丁外に聞こう。予いまだ石を見ざるも、響きといふものは少年の時、はるかに聞いたることあり。」と記されている。また、天明の速見郡志に「鶴見山亀宝山の近辺に在る石躍



則ち石と為る 形大小あり云々」

とあるところを見ると、漢の国にもあつたらしい。

摩訶不思議な石であるが、神石、踊石を知るものが少ない。鶴見岳は火男火売神社を中心として景行天皇のこ

り上がるこ

と数十丈

其の音二十

余里に聞こ

ゆ 是則ち

風雨の瑞な

り 漢謂う

所の舞い石

の類か 湘

川記に零凌

に石燕あり

風雨に遇

えば則ち飛

んで燕の如

し 止れば

となど史蹟と伝説が成長して、御嶽権現の靈験記など面

白いものが残っている。このお宮は脳病の神様で、常日

頃腦の悪い人々が參籠して祈願をこめている。神域は老

杉や老楓に囲まれて神さびて冷気身にしみむといった場

所で、付近には昔天然氷の貯蔵所の跡がある。参道の脇

に湧出する水は、夏でも齒にしみる冷水で、御嶽権現の

水といわれている。

神山の躍石の事

此石いと大にして鶴見山の半邊なかばちかくに有 石のめぐりには草

生出す たとへば槌などもてそこらならしたるが如し

此神山折として鳴どよむ事有 此石のおどる故也と云傳

うなり 年々冬至の前後必ず震動の音あり 此山礬硫の

気土中にさかんなるが故に 一陽発動のときに殊に震ふ

は理ことわりりにしてあやしむ事ならず 此石のしる処にあらじ

されども此石のめぐりに草生出すことは 此大石に重り

たる大石地中に有て是をさゝえたれば 其重りたる所の

みにて 外は浮きたる如くなる故に 山震ふ時は大石と

いへども動き躍る事有なるべし あやしとするに足らざ

る事也かし

「鶴見七湯の記」より